

先進プロジェクト研究2013年度年次報告書

「社会科学の理論的・哲学的基礎の探求－批判的实在論を参照点として－」

担当 ；佐藤春吉、松田亮三、加藤雅俊

受講生；野村 優、中澤 平、大月功雄、赤松千代

目次

I. はじめに

1. 本プロジェクト研究の目的
2. 本研究の意義

II. 2013年度研究計画の概要およびスケジュール

1. 2013年度研究計画の概要と結果
2. 年間スケジュールについて
 - ① 社会を説明する『*Explaining Society*』の輪読精読翻訳作業；毎週正規授業時間
 - ② 批判的实在論の基礎についての理解と検討；「批判的实在論研究会」との連携
 - ③ 研究セミナー 批判的实在論と対人支援；人間科学研究所との連携

III. 研究内容

1. 今年度研究内容の概略
2. 『社会を説明する』翻訳作業と出版計画、および同書翻訳出版の意義

IV. 研究成果

1. 本プロジェクト研究の活動を通じた全体研究成果
2. 本プロジェクト研究参加者の研究内容と成果（報告レジメ等資料を含む）
 - ① 佐藤春吉（担当教員）
 - ② 松田亮三（担当教員）
 - ③ 加藤雅俊（担当教員）
 - ④ 野村優（受講生；博士後期課程2回生）
 - ⑤ 中澤平（受講生；博士前期課程2回生）
 - ⑥ 大月功雄（受講生；博士前期課程2回生）
 - ⑦ 赤松千代（受講生；博士前期課程1回生）

先進プロジェクト研究年次報告書

「社会科学の理論的・哲学的基礎の探求―批判的实在論を参照点として―」

担当 ；佐藤春吉、松田亮三、加藤雅俊

受講生；野村 優、中澤 平、大月功雄、赤松千代

I. はじめに

1. 本プロジェクト研究の目的

本年度から開始した本プロジェクトの研究の目的は、社会科学の研究を導く基礎となるメタ理論が見失われつつあるという社会科学の危機に対応して、正面から語られず暗黙の内に前提されている社会科学における存在論や認識論にたいして自覚的な反省を行い、きわめて重要かつ応用力のある社会学の基礎理論を提案している「批判的实在論 (critical realism)」を参照点にして、自らの研究に確かな指針を与える可能性を探究しようとするものである。本プロジェクト研究では、まずは、批判的实在論の概要を理解し、その意義と限界をふまえて、各自の研究に活用していくための学問的基礎を構築していくことを目的としている。つまり、本プロジェクトは、各自が進める研究とは関係のない別の研究をするのではなく、それぞれ自らの学問領域において自らの研究を進めるなかで、批判的实在論が提起する思考法や方法論と対話しつつ、それぞれの学びと研究法を反省的にとらえ返し、実際の研究に生かしていくことをめざし、そのための知的基盤を鍛えることを目的としている。また、本プロジェクト研究の成果を発信することによって、社会科学の哲学的基礎への反省の機運を醸成し、社会科学刷新に向けた問題提起をしていくことも、目標としている。

2. 本研究の意義

社会が複雑化・流動化するのにもない、それらを分析対象とする社会科学それ自体も大きな転機に差し加かっている。現在、社会科学の諸領域では、経験主義や実証主義に依拠した従来の学問のあり方に疑問が呈され、刷新を求める動きが生じている。「批判的实在論」は、これまでの社会科学の理論的・哲学的基礎を批判的に検討し、「实在論的存在論 (realistic ontology)」という存在論に依拠した新たな社会科学を創造する研究構想として、英語圏を中心に、社会学、経済学、政治学など、多くの学問領域で注目を集めている。この理論は、上述の専門分野の基礎理論のみならず、社会福祉や教育、ジェンダー論、メディア論、言説分析、国際関係論や、平和学、組織論など、多彩な特殊研究領域にわたって応用されてきており、専門分野を異にする本研究科院生各自の研究にとっても、その理論的支えを獲得する上で益するところが大きいと考えられる。また、社会科学研究の方法論的な指針について反省する作業は、特に確かなメタ理論を欠き方向喪失状態ともいえる社会科学の現状に問題を提起し、避けられがちなテーマに真摯に向き合う議論状況を作り出すことに、なにがしかの貢献をすることが展望される。

II. 2013 年度研究計画の概要およびスケジュール

1. 2013 年度研究計画の概要と結果

批判的実在論は、すでに重要な業績の一部が邦訳される（R・バスカー『科学と実在論』、同『自然主義の可能性』、M・アーチャー『実在論的社会理論』、T・ローソン『経済学と実在』）など、わが国においても注目を集めつつあるが、英語圏諸国に比べると、十分な議論が展開されているとはいえない。

これらの状況をふまえて、本研究では、i) すでに邦訳されている業績のなかでも、批判的実在論の創始者であるロイ・バスカーの『科学の実在論』および『自然主義の可能性』を主たるテキストに、この理論基礎を理解することを目標に掲げた。ii) また、未邦訳の重要な業績で、この理論の優れた概説書でありまた研究者むけに独自の研究方法論を展開している『社会を説明する』（B. Danermark et al. 『Explaining Society』）を中心にその内容を理解し、批判的に検討することを目標とした。同書『社会を説明する』については、担当教員と受講院生をふくめた邦訳チームを作り、邦訳書として刊行する計画を立てて、輪読と翻訳作業を進めることとした。現在、ナカニシヤ書店より、同書刊行の承諾を得て、翻訳作業は着々と進んできている。また、原著者とも連絡をとってすすめており、海外の研究者との交流の芽ができてつつある。同訳書の刊行によって、批判的実在論の概要や意義についての理解を広め、社会科学の新しい理論的・哲学的基礎を明らかにすることは、日本における社会科学研究にとっても、重要な問題提起となり、少なからざる貢献をなすであろうことを期待している。iii) 同時に、各専門領域における研究への応用可能性についても検討し、これらに依拠した個別研究を成果として発信していくことも目標としている。プロジェクトを通じて、参加者はそれぞれに、批判的実在論を学び、その批判的検討を通じて、各専門領域についての理論的・哲学的基礎を反省し、各自の個別研究に生かし反映させていくことを目指している。

また、本プロジェクト研究以外に、別途さらに参加者の枠が広い「批判的実在論研究会」が本学産業社会学部の教員院生を中心に発足しており、本プロジェクト研究も、同研究会の活動と連動しながら、実質的な研究を進めてきている。本プロジェクト研究参加者も積極的に同研究会の例会に参加し、相乗的な関係の中で研究を進める形をとってきている。

2. 年間スケジュールについて

以下は、課題ごとに、当初計画と実際に実行されたスケジュールを示す。

① 社会を説明する *Explaining Society* の輪読精読翻訳作業；毎週正規授業時間

上記の大きな目標のもとに、本プロジェクト研究の毎週の授業時間については、主として上記の英文テキスト B. Danermark et al. *Explaining Society*, Routledge を輪読し、合わせて分担して翻訳作業を進める形式をとった。当初計画では、数章を 1 回で終えるペースを考えていたが、翻訳を意識して正確な訳を検討したこともあり、また、さまざまな論点について検討するなかで、議論する項目が多く、当初計画が現実的でないことが判明し、

ペースを落として正確な理解を心がける方針に切り替えた。批判的实在論は、その用語が豊富で通常の使用法と異なるオリジナルな意味を持つものが多く、訳語の確定や意味内容の正確な理解について特別な注意が求められる点も、議論時間が多くなる理由である。しかし、当初計画からは遅れることとなったが、このことによって、理解の深まりが生まれた点は成果として評価すべきである。

輪読は、上記のように、正確を期してペースダウンしたが、実際の翻訳作業は、分担を決めて各自で進めており、すでに全8章の8割ほどの原稿がそろってきており、現在、提出された訳稿の見直し検討作業を進めている。輪読形式の検討は、ようやく4章に進んだところであるが、翻訳作業の詰めの課程が残っている。邦訳の最終的な確定のための検討を行いつつ、全体を通して再度検討して、全体的理解を共有し、各自の研究にいかしていきたい。

<正規授業>内周水曜日4限(演習実習室1)

第1回(4月10日); 打ち合わせとテキスト講読、
以下基本的に同上テキストの講読

第2回(4月17日)

第3回(4月24日)

第4回(5月1日)

第5回(5月8日)

第6回(5月15日)

第7回(5月22日)

第8回(5月29日)

第9回(6月5日)

第10回(6月12日)

第11回(6月19日)

第12回(6月26日)

第13回(7月3日)

第14回(7月10日)

第15回(7月17日)

第16回(10月2日)

第17回(10月9日); 批判的实在論と合同開催)

第18回(10月16日)

第19回(10月23日)

第20回(10月30日)

第21回(11月6日)

第22回(11月13日)

第23回(11月20日)

第 24 回 (11 月 27 日)

第 25 回 (12 月 4 日)、

第 26 回 (12 月 18 日 ; 批判的实在論研究会と合同開催)、

第 27 回 (1 月 8 日)

第 28 回 (1 月 15 日)

以上

② 批判的实在論の基礎についての理解と検討 ; 「批判的实在論研究会」との連携

上記のように、本プロジェクト研究と連携させながら、「批判的实在論研究会」を立ち上げ、研究会をおこなっている。本プロジェクト研究参加者は、同研究会の活動にも参加し、さらに、本プロジェクト研究の目標を達成すべく研究をおこなってきた。同研究会は、ほぼ隔週 1 回のペースで例会を行い、適宜「批判的实在論」についての基本理解をふかめるための活動を継続的に行うこととした。ここでは、批判的实在論について、以前からある程度研究を進めてきた佐藤より、批判的实在論の考え方の基本骨格について発表した。また、特に、邦訳文献、特にロイ・バスカー著『自然主義の可能性』を中心にその内容理解と批判的検討を継続して行うこととし、先進プロジェクト研究参加の教員・院生は基本的に本研究会にも参加し、中心的な役割を担ってきた。同書は、表題から連想される内容とは異なって、バスカーの社会科学基礎論を展開した批判的实在論の基本文献である。同書の検討会は、毎回議論が白熱し、当初の予定よりもペースを落とし、内容理解の十全を期す方向に方針を転換した。しかし、ここでの基本文献の検討は、批判的实在論の基礎的理解にとってはきわめて重要であり、毎回の検討による白熱した討論は、その理解を深めることに大いに貢献したと考える。同研究会は、教授会の無い隔週火曜日に開催する予定をたて、前期はほぼ計画通り進めてきたが、さまざまな校務などとの関係で参加者の日程調整が難しくなり、後期からは、月 1 回として、水曜日の先進プロジェクト研究に連続させ共同で開催することとした。

批判的实在論研究会開催日程 (先進プロジェクト研究と連動)

各回とも、午後 3 時～5 時 (志学館 125)

第 1 回 (4 月 23 日) ; 『自然主義の可能性』第 1 章

第 2 回 (5 月 14 日) ; 同第 2 章前半

第 3 回 (5 月 28 日) ; 同上

第 4 回 (6 月 11 日) ; 同第 2 章後半

第 5 回 (6 月 25 日) ; 同第 2 章補説

第 6 回 (7 月 16 日) ; 同第 3 章 1～3 節

第 7 回 (10 月 15 日) ; 第 3 章後半部

この後、日程調整のうえ、開催を月 1 回とし、水曜日先進プロジェクト研究と合同開催 (水曜日 2 時 40 分より、演習実習室 1)

第 8 回 (11 月 20 日) 同第 3 章後半部継続検討

第9回（12月18日）同第3章5, 6節

第10回（2014年3月26日-27日予定）合宿；Explaining Society 翻訳作業検討会

※以上のように、先進プロジェクト研究の研究会活動は、批判的实在論研究会と有機的に連動して、進められてきたといえる。

③ 研究セミナー 批判的实在論と対人支援；人間科学研究所との連携

人間科学研究所「対人援助におけるエビデンス-実践回路研究」ならびに「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学=実〉連環型研究」方法論チーム主催の上記セミナーに、批判的实在論研究会が共催する形で、セミナーを開催し、先進プロジェクト研究参加院生も参加した。同セミナーは、人間科学研究所の上記研究グループを主催する教員松田が、本先進プロジェクト担当を担当しており、また批判的实在論研究会のメンバーであることから、企画立案されたものである。本セミナーでは、報告「批判的实在論とは何か？」を本プロジェクト研究担当教員佐藤が、また、報告「対人支援研究における批判的实在論の活用例—医療・福祉を中心に」を同じく担当教員松田が行い、有意義な議論がかわされた。特に、批判的实在論の基礎的な理論研究を超えて、具体的な諸問題への応用に向かう研究が進み始めたことは、本先進プロジェクト研究の進展にとっても、あらたな展望と可能性を開くものとして、大きな成果になったと言える。

Ⅲ. 研究内容

1. 今年度研究内容の概略

先進プロジェクト研究の活動内容は、上記によってその概略を述べている。ここでは、その研究内容について箇条書きで示すことにする。

① 批判的实在論の基礎的な理解について

上記したように、主として、ロイ・バスカー『自然主義の可能性』について共同で検討し、その主張内容について理解を深めてきた。

② スウェーデンの社会学研究者 Berth Danermark 氏らの英文テキスト『社会を説明する (Explaining Society)』を講読することによって、批判的实在論にもとづく社会科学方法論についての基本的な考え方についての理解を深めてきた。また、すでに、ナカニシヤ書店から邦訳出版の承認を得、同書の著作権を取得し、本プロジェクト研究参加者と難的实在論研究会参加者による翻訳作業が進んでいる。

③ これまで、批判的实在論について先行的に研究してきた佐藤春吉が、過去に発表した諸論文について紹介し、各自それらを参考に、批判的实在論の特徴について理解を共有するようにしてきた。

④ 担当教員は、各自自らの専門研究のなかに、批判的实在論の主張や観点を批判的に参照応用するよう努めてきた。それらの成果について、詳しくはIVに示す通りである。

⑤ 受講院生は、各自研究会での学びを起点にしながら、各自独自に批判的实在論について理解を深め批判的に検討しつつ、各自の研究の中に活かして行く方向を探ってきた。

本プロジェクト研究は、研究会形式で進める共同研究であるが、理論研究という性格上、毎回の授業は文献の講読と討議という形式をとっている。しかし、批判的实在論の理解を踏まえた応用的研究は各人それぞれの課題のなかに生かしていくべきものである。地味な研究活動であるが、本プロジェクト研究を起点にして、実質的な意義ある研究が各人ごとに促進されていくことになる。本プロジェクトはまだ、立ち上がったばかりであるが、一定の時間をかけるなかで実質的な研究成果に結びついていくだろうことが期待される。※そうしたプロジェクトのテーマと内容との関係で、この項目で、要請された字数を埋める叙述は、本プロジェクト研究の性格からして適当ではないと思われる。そこで、本プロジェクト研究を通じて各人が学び取ったこと、あるいは進めた研究とその成果について、IVにおいて、提示することとする。したがって、以下では、本プロジェクト全体で進めた研究の内容と成果をきすとともに、IVで、それぞれに進めた研究の内容と成果を報告することとする。

2. 『社会を説明する』翻訳作業と出版計画、および同書翻訳出版の意義

本プロジェクト研究において本年度、文字通り共同で取り組んだ研究は、上記②の『社会を説明する』の翻訳作業である。そこで、ここでは、同書の内容、意義について説明することによって、今年度の研究の内容についての報告としておきたい。

今年度、本プロジェクト研究で取り組んだ最大の課題は、批判的实在論 (critical realism) の立場から書かれた研究方法論の優れた入門書、Berth Danermark, Mats Extröm, Liselotte Jakobsen, Jan Ch. Karlsson; *Explaining Society: Critical realism in the social sciences*, Routledge, 2010 の翻訳作業であり、その刊行に向けた取り組みである。

批判的实在論は、イギリスの哲学者ロイ・バスカー (Roy Bhaskar) が提唱し、独特の社会存在論にもとづく社会科学論、方法論を展開し、多分野にわたる学際的な研究をリードしている社会科学の基礎理論である。日本では、まだほとんど知られていないが、現在ではイギリスのみならずスカンジナビア諸国を含め欧米諸国で多くの研究グループが形成され、多彩な分野の有力な研究者が集まって精力的な共同研究を展開している。

批判的实在論の特徴は、科学の成立根拠を客観的实在についての超越論的推論によって論証し、世界の実在性を、開放性 (オープン・システム) の相でとらえ、創発性と階層性という観点から多元的な複合的因果連関を考察する方法論を展開している。この考えは、必然性と偶然性の絡まりあう実在的因果連関を捉えるだけでなく、認識対象の実在性と同時に認識主観の実在性を承認することによって、主観の因果的力を承認するとともに、概念の実践的構成論を積極的に主張する。これによって、「存在論的实在論」と「認識論的相対主義 (知識の適合性を判定できないという判断的相対主義ではない)」を同時に主張し、知識の社会的歴史的相対性と実践的目的に適合する客観的知識の双方の妥当性を明晰な論理で捉えている。科学的推論についても、演繹、帰納以外にアブダクション、リトロダ

クシオンという独自の推論の重要性を主張する。また、このような考えをもとに、社会的実在の独自性格を論じ、特有の社会存在論を展開する。この観点から、社会構造と行為主体の関係についても、これまでにないユニークな展開を示している。批判的実在論は、ヒューム主義的経験主義を徹底的に批判し、科学を予測可能性で評価する考え方に代えて、説明力こそ評価の基準であると主張し、「説明科学」を提唱する。本書の題名「社会を説明する」には、そうした意味がこめられている。批判的実在論では、その理論展開のために非常に独特な用語が多数あみ出され、なじみのない者にはその議論は一見とっつきにくく奇妙にも思えるが、その用語法や思考法を理解すれば、きわめて合理的な理論構成となっている。

本書では、スウェーデンの社会学研究者たちによって、批判的実在論の基本的な考え方、その存在論と認識論をふまえた具体的な社会科学研究における方法論（「方法論的多元主義」）が非常に分かりやすく質を落とすことなく解説されており、社会科学における批判的実在論の優位性について説得力をもって書かれた優れた入門書となっているだけでなく、実際の研究に新たな観点と指針をあたえるものとなっている。本書は、ポスト・モダンの流行以降観念論的主観主義や相対主義に陥ってしまった社会科学に、客観的な知識を擁護しつつも独断論を免れた新しい合理的な科学論を示してくれる。本書の刊行は、日本の社会科学研究に新たな観点をもたらし、大きな刺激を与えるものになると確信している。

以下、本書の内容を簡単に紹介しておく。第1章は導入部であり、社会科学への批判的実在論的なアプローチの基本特徴が解説されている。社会科学方法論では、その前提となる存在論や認識論が明示的に語られることはほとんどないが、本書はその重要性を強調し、概念、実践、対象の関係理解が決定的に重要であると主張している。概念は社会的実践的産物であり、可謬的である。これに対して対象は主観から独立している。科学は概念化の活動であり、概念化の働きを理解するためには、存在論と認識論は欠かせないのである。また、そのような批判的実在論の理解が、どのようにこれまでの社会科学の各種の不幸な二元的対立を乗り越えるものとなっているのかについて語られている。最後に批判的実在論の成立の背景が示されている。第2章では、科学が可能であるためには世界はどのようなものでなければならないか、という批判的実在論特有の問いの重要性、科学実験の超越論的分析の意味、世界の三つのドメイン（経験、出来事、深部の実在）の考え方、さらには知識の意存 (transitive) 性と対象の自存 (intransitive) 性の関係の捉え方、科学の実践的性格について解説されている。また、科学の実践的性格、実践、意味、概念、言語の関係について、自然科学の対象と社会科学の対象の同一性と相違について、さらに、社会の意味媒介的な性格、高度の開放性と実験不可能性、物質性と意味解釈の二重性について説かれ、二重の解釈学の必要性に説き及んでいる。第3章は、概念的抽象と因果性について論じている。社会科学では、概念的抽象化がいかに重要か、したがって理論の役割がいかに重要か、世界の三層（上記三つのドメイン）構造に即して詳説されている。また批判的実在論の中心概念のひとつである、因果的力の創発と構造との関係について、また、必然

性と内的関係について、開放システムと閉鎖システムの関係について詳しく論じられている。第4章では、科学における一般化の意味とその重要性、科学における推論の4つの様式（演繹、帰納、アブダクション、リトロダクション）とその働きについて、特に、批判的实在論固有の主張である、現象から真の原因たる深部の实在の内的メカニズムを推論するリトロダクションの重要性について詳しく語られている。また、経験主義の帰納法ではなく、リトロダクションを重視した「説明的社会科学」の考え方について、社会科学の方法論にかかわらせた詳しい解説がなされている。第5章では、社会科学における理論の役割が、経験主義批判と関連させて論じられるとともに、理論と経験的な研究の関連について批判的实在論の考え方の優位性と多様な方法を受け入れる許容力について、特に中範囲の理論とグラウンデッド・セオリーの利点と問題点との評価と関連させて説明されている。第6章では、批判的实在論の「方法論的多元主義」について、また、質的調査研究と量的調査研究（著者たちは、これらを外延的研究と内包的研究と呼ぶ）の統合を主張する。また、経験的な研究において、批判的实在論は、どれか特定の方法だけを絶対化せず、対象の性質と認識の目的に即して柔軟にさまざまな方法を批判的に協力統合させる方法的態度を提唱している。第7章では、社会科学と社会的実践との積極的な相互協力関係の必要性について論じている。科学は、人間の幸福に寄与するものであり、社会の問題を発見しその原因を解明し、その実践的解決を思考する批判的機能を有していることを主体の存在論的性格との関係も含めて積極的に主張している。この問題にかかわって、価値判断と事実認識の関係についても、独自の議論を展開している。著者たちは、社会批判は、しかし、社会的存在の複雑性を考慮に入れて、多面的な見方を採用しなければならないという慎重な姿勢をも同時に主張している。第8章では、結論として、これまで各章で論じてきたことを簡潔に整理総括し、その要点を記している。

概略以上のような内容をもった『社会を説明する』が、本先進プロジェクト研究参加者および、それと連携して進められている産業社会学部の教員院生を中心とする批判的实在論研究会によって翻訳され、来年度中には刊行される予定である。本書は、いままで、曖昧にしてきた研究の前提となる基礎的な哲学的な観点に明確な指針を示し、多くの社会学者に社会科学研究推進のための方向を与えてくれるものと確信している。その成果の完成は年度を超えることになるが、今次研究プロジェクトの最大の成果といえるであろう。

なお、翻訳担当者は以下の通りである。

翻訳者；佐藤春吉（申請者）・立命館大学産業社会学部・教授（監訳・第1章担当）

木田融男・立命館大学産業社会学部・特任教授（第7章担当）

松田亮三・立命館大学産業社会学部・教授（第5章担当）

加藤雅俊・立命館大学産業社会学部・準教授（第4章担当）

吉田幸治・立命館大学産業社会学部非常勤講師（第3章担当）

藤田 悟・立命館大学産業社会学部非常勤講師（第8章担当）

野村 優・立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程（第6章担当）

中沢 平・立命館大学社会学研究科博士前期課程（第2章担当）

（原著者；Berth Danermark, Mats Extröm, Liselotte Jakobsen, Jan Ch. Karlsson）

なお、佐藤春吉、松田亮三、加藤雅俊は、本プロジェクト担当教員。木田融男は、来年度本プロジェクト研究担当予定者。野村優、中澤平は、本プロジェクト研究受講者である。なお、本プロジェクト研究受講者、大月功雄、赤松千代には、事項索引や参考文献整理などで、本翻訳出版に協力することとしている。

IV. 研究成果

1. 本プロジェクト研究の活動を通じた全体研究成果

本プロジェクト研究の活動全体の成果は、研究スケジュールに示した研究活動や、IIIの研究内容で示した、各項目ごとの研究内容にそって活動成果が認められると考える。

繰り返せば、その成果は以下の通りである。

- 1) 批判的实在論の基礎的な理解について
上記したように、主として、ロイ・バスカー『自然主義の可能性』について共同で検討し、その主張内容について理解を深めてきた。
- 2) スウェーデンの社会学研究者 Berth Danermark 氏らの英文テキスト『社会を説明する (Explaining Society)』を講読することによって、批判的实在論にもとづく社会科学方法論についての基本的な考え方についての理解を深めてきた。また、すでに、ナカニシヤ書店から邦訳出版の承認を得、同書の著作権を取得し、本プロジェクト研究参加者と雑誌的实在論研究会参加者による翻訳作業が進んでいる。
- 3) これまで、批判的实在論について先行的に研究してきた佐藤春吉が、過去に発表した諸論文について紹介し、各自それらを参考に、批判的实在論の特徴について理解を共有するようしてきた。
- 4) 担当教員は、各自自らの専門研究のなかに、批判的实在論の主張や観点を批判的に参照応用するよう努めてきた。それらの成果について、詳しくはIVに示す通りである。
- 5) 受講院生は、各自研究会での学びを起点にしながら、各自独自に批判的实在論について理解を深め批判的に検討しつつ、各自の研究の中に活かして行く方向を探ってきた。
ということになる。

2. 本プロジェクト研究参加者の研究内容と成果（報告レジメ等資料を含む）

以下では、本プロジェクト研究を通じてそのような学習、研究の成果が生まれているのか、各自の研究にそくした形で紹介し記録に残しておくことにする。

① 佐藤春吉（担当教員）

本プロジェクトは、先行的に批判的实在論を研究してきた経緯から、批判的实在論の基本的な理解について、研究会等で報告し、討議に参加して検討してきた。

- 1) その際、佐藤が行った過去の研究、M. アーチャー『实在論的社会理論：形態生成論アプローチ』の翻訳（青木書店、2007年）、「M. ヴェーバーの文化科学と価値関係一（上・下）」（『産社論集』vol.48,no.3,4）。「存在論からの社会科学の刷新」『唯物論と現代 第40号 20世紀の唯物論』（文理閣、2008年）。「批判的实在論（Critical Realism）と存在論的社会科学の可能性」『唯物論研究年誌』（第17号、2012年）があり、そうした一定の蓄積を本プロジェクト研究でも紹介し、議論の素材として参考にしてきている。
- 2) 今年度2014年2月1日に開催された、セミナー「批判的实在論と対人支援」では、「批判的实在論とはなにか？」と題する報告を行った。そのレジメは、別途資料を添付しておく。
- 3) 昨年度から継続している、M. ヴェーバーの科学論の構図と理念型論の世界観的な基礎を、多元主義的存在論の視点から読み解く研究を継続し、そのなかで、バスキアの批判的实在論の観点も参照している。本年度の成果は、「M. ヴェーバーの現実科学と因果性論（上）—M. ヴェーバーの科学論の構図と理念型論-多元主義的存在論の視点からの再解釈の試み-その2」（『産社論集』vol.49,no.2）を掲載し、同名論文の（中）を執筆し、『産社論集』vol.49,no.4（2014年3月）に掲載予定で現在校正中である。
- 4) 本年度は、批判的实在論研究グループの一人で著名な社会学研究者マーガレット・S. アーチャーの論文「主観性の存在論的位置：構造とエイジェンシーをつなぐ失われた環（The ontological status of subjectivity: the missing link between structure and agency）」を翻訳し、本学の『人文科学研究所紀要』104号（2014年3月）に掲載予定である。
- 5) 本研究プロジェクトの最大の研究企画となっている、上記『社会を説明する（Explaining Society）』の翻訳企画を監訳者として進め、第1章を担当するとともに、各訳者の翻訳原稿全体について訳の点検、訳語の統一、語調の統一、その他翻訳編集作業全般について調整訳を努めている。

以下、研究セミナー「批判的实在論と対人援助」における佐藤の報告レジメ「批判的实在論とは何か」を載録する。

.....

批判的实在論とは何か

「研究セミナー 批判的实在論と対人支援」

2014,2,1 立命館大学 佐藤春吉

はじめに

「批判的実在論 Critical realism」は、実在論的存在論 *realistic ontology* の新しい基礎づけによって、社会科学をはじめとする *human science*(人間の活動が媒介する諸現象の研究を行う諸科学、社会科学はその中心)の刷新をめざして活発な学際的研究をおこなっているグループの哲学的綱領をさしている。

国際学会 International Association for Critical Realism (IACR) (<http://www.criticalrealismblog.blogspot.jp/>) を組織している。

その哲学的な基礎づけをリードしているのは、哲学者、ロイ・バスカー (Roy Bhaskar) (現在ロンドン大 IOE、World scholar) である。哲学的には彼が中心であるが、このグループは、かなりの数の優秀で個性的な研究者が独自にそれぞれの分野で実質的研究を展開しており、バスカーへの批判も含めてその内容理解や展開も多様な幅をもっており、一枚岩のような教条になっているわけではない。その意味で、批判的実在論は、一定の哲学的理論的諸前提を共有して社会科学および人間科学の刷新をめざす研究者たちの共同プロジェクトであると言えよう。

このプロジェクトの共同綱領の基礎となっているバスカーの主要著作は、式部信訳『科学と実在論』(法政大学出版局、2009、*A Realist Theory of Science, Verso, 1975*)、式部信訳『自然主義の可能性』晃洋書房、2006 (*The Possibility of Naturalism, Verso, 1979*) である。

前者は、「超越論的実在論 *transcendental realism*」に基づいて、主として自然科学を題材に、科学の存立前提の探求から独自の存在論による世界構造論を展開している。後者は、『科学の実在論』の成果をもとに、「批判的自然主義」を主張し、自然科学と対立しない社会科学の構想をもって、独特な社会の存在論と社会の認識論を展開している。この二つの著作は、当時イギリスでは、批判的社会科学を志向する研究者にかなりのセンセーションを巻き起こしたと言われている。いまでも、この二著が批判的実在論の最重要テキストになっている。

その後書かれたもので、共同綱領の精緻化に寄与している重要テキストが、Roy Bhaskar, *Scientific Realism & Human Emancipation, Verso, 1986* と *Reclaiming Reality, Verso, 1989* である。ここまでは、基本的に科学論を基調とした存在論、認識論、批判的科学的なための方法論であり、批判的実在論の立場に立つ多くの分野の研究者に指針を与える業績となっている。

※この後、バスカーは弁証法研究に展開し、相当難解で入り組んだ議論を展開した。その後は、さらに倫理、解放思想に志向し、いわゆる *meta reality* 論など、*spiritual turn* といわれる方向に向かった。この時期以降のバスカーの著作は、このグループの中でも、賛否さまさまな反応を呼び、論争もある。

※ただし、バスカー自身は、批判的実在論の基礎づけに当たる部分を *basic critical realism* と名付けて、批判的科学的なための共同綱領として大切にしている。グループでは、相互批判をしつつも、大まかな共同綱領を共有した共同研究が続けられている。

◆「批判的实在論」の呼称について

「批判的实在論(critical realism)」という名称は、バスカーの「超越論的实在論」(『科学の实在論』の主題)と「批判的自然主義」(『自然主義の可能性』の主題)という主張を結合した短縮形としてこの研究グループ内で作られた用語で、バスカー自身によっても使用されるようになったものである。

『自然主義の可能性』では、その書名からくる印象とは異なって、実は社会存在論にもとづく新しい社会科学の基本方向が展開されている。そこで唱えられた「批判的自然主義」の意味は、社会科学も、自然科学も抽象力と概念形成によって超経験的な深部の実在的諸原因や法則を探るという形式をそなえている点では自然科学と同じ構造を持つということである。こうして、批判的自然主義は、両科学の間に完全な異質性をみて双方の断絶を主張する見解を批判するとともに、同時に、実証主義のように自然科学とまったく同じ方法を社会科学にも適用できるとする立場にも反対するという趣旨である。

バスカーは、『科学の实在論』で主に自然科学をモデルに構築された超越論的实在論が、社会科学論にも応用できるという信念をもっていた。したがって、自然科学と社会科学を分断して扱う思想潮流に対抗したかった。「自然主義」という名称は、この科学認識の構造的同一性を指している。

ただし、超越論的实在論は、科学は認識対象の「実在的定義」を志向するべきだと主張する。したがって、社会科学論を開拓するためには、社会存在に特有の性質はなにかという問題が中心の問題となる。この観点から、「批判的自然主義」の主張は、内容的には、「自然主義」には特有の限界があるという意味あいがかが強く打ち出され、自然主義の限界を超えるという議論を展開することになる。というわけで、『自然主義の可能性』では、批判的实在論特有の斬新な社会存在論に基づくユニークな社会科学論の構想が示されている。ネーミングからくるイメージと実際の内容とは不整合な結果になっている。いまでは、「批判的自然主義」とか「自然主義」といった言葉は、あまり聞かれない。アーチャーは、『自然主義の可能性』は、実は『自然主義の不可能性』とすべきだったとバスカー自身も認めているなどと述べている cf. M.Archer, R. Bhaskar, A. Collier, T. Lowson, A. Norrie (eds.), *Critical Realism – Essential Readings*, Routledge, 1998, p.190. いずれにしても、今では「批判的实在論」が一般的な呼称として使用されている。「超越論的实在論」という用語は批判的实在論の内容理解には不可欠であるが、自然主義(または批判的自然主義)という用語は、必ずしも必要とされていない。

批判的实在論の魅力的なところは、この新しい社会存在論による社会科学方法論の新展開であり、それによる社会科学の刷新への有益な土台作りとその展開可能性にある。「批判的实在論」という呼称は、「超越論」という難解な用語をとともわず、しかも素朴实在論などの「批判以前」の实在論との差違をも明確にできるということで採用されている。

I. 批判的实在論の基本構想

批判的实在論の基本構想は、さまざまなかたちで解説されているが、ここでは、バスカーの議論をもとにその中心的な論点を、私が理解した範囲で紹介する。

1. 一般的特徴

- ① 批判的实在論＝バスカーの超越論的实在論は、科学論、科学哲学の領域に属する研究から出発している（Bhaskar の Oxford 時代の Rom Harré が彼の師。ロム・ハレは、实在論にもとづく科学哲学、科学史、科学方法論、心理学等多彩な業績がある。一時は彼も批判的实在論研究グループに参加協力していた。また、アルゼンチン人だが主としてアメリカを中心に国際的に活躍している实在論科学哲学者 Mario Bunge も、批判的实在論と連携できる理論家とみなされている）。
- ② その研究の背景には、非主流ではあれ、イギリスやアングロサクソン系の思想伝統のなかに継続的に存在していた实在論の思想潮流に関連しているように思われる。
- ③ 他方では、イギリスの本流をなす伝統的な経験主義哲学の流れ、ヒュームやポパー、論理実証主義などの思想との対峙を強く意識しており、バスカーの研究の中心には実証主義と経験主義への根元的批判と乗り越えというテーマが据えられている。
- ④ また、バスカーの思想の基底には、あきらかにマルクスおよびマルクス主義的な社会主義的解放思想がある。しかし、その語り方や用語法、理論の組み立て方は、いわゆる正統「マルクス主義」とは異なって非常に独特であり、オリジナルな思想展開を行っている。彼の科学論は、知の生産過程論をマルクスの労働論、アリストテレス的な4原因論にもとづいて構想する点で特異である。しかし、これもマルクスの思想を彼なりに深めたものであり、科学的生産についてのアルチュセールの思想の影響も見取れる。このように見れば明らかのように、批判的实在論研究グループ全体ではないにしても、少なくともバスカーの思想は明確にネオ・マルクス主義として理解できる思想であると思われる。バスカーの著作には、マルクスへの言及が頻繁に認められ、彼が使用する用語の多くは独特でオリジナルなものであるが、そうした新奇な概念群とならんで、疎外や物象化、イデオロギー批判、解放（emancipation）、弁証法といったことが語られ、マルクス主義は彼の思想の根幹に座っているといつて間違いない。実際、批判的实在論グループには、自覚的なマルクス主義者が多く参加している。
- ⑤ 批判的实在論では、従来のマルクス主義にみられるようなあまりに特殊化したヘーゲルの用語法を用いないで、応用力の広い合理的科学論や科学方法論が展開されており、多くの人々が、そこに批判的社会科学とマルクスの思想との統合を貫く新たな可能性を見いだしているように思われる。
- ⑥ 批判的实在論には、聞き慣れない用語がたくさんあるが、世界存在ならびにその中の人間の位置についてクリアな理解がもりこまれており、その意味内容さえ理解できれば、だれにでも、自らの思考を整理し、研究戦略や研究方法の指針として応用できるところがその魅力となっている。
- ⑦ 科学論的な綱領としては、批判的实在論は、その思想的立場を特に限定しないと主張している。批判的实在論は、どんな思想の持ち主であれ、科学的認識を進めようとするものに指針を与える開かれた科学の方法を示すものであると主張している。ただし、その科学は

自ずと解放的批判的機能を果たすことができるとも主張している。

II. 批判的実在論の概要（以下、主要な主張点のみ列挙します）

① ヒュームのな経験主義的因果性理解を批判し、必然的因果連関の存在を主張

経験主義（実証主義）の手法＝事象観察から諸事象の近接関係や規則性としての法則的連関を見いだす方法、を批判。

経験主義のいう諸事象(events；出来事)の間の恒常不変の随伴関係(constant conjunction)としての法則は、必然的因果連関を立証できない。それは、どこまでも偶然的因果連関、または慣習的なものにとどまる。自然界の必然的因果連関は存在する。

「自然必然性問題」は経験主義科学論の難問であった。実際、経験主義が想定するような事象間の constant conjunction は、解放システムであるこの世界を観察するだけでは決して見いだすことができない。見いだせるのは、実験室などの人為的閉鎖システムにおいてのみである。そもそも科学の目的は、constant conjunction を見いだすことではない。

② 「事物の存在論」：事象（event）連関は原因ではない。事象連関は結果である。経験主義は、事象連関に着目するが完全に間違い。事象連関は現象にすぎない。原因は事物 thing にそなわる「事象生成のメカニズム」である。科学の目的は、事象連関の認識ではなく事象を生起させる事物の生成メカニズム、事象生起の必然性、性質、傾向性、法則を見いだすことである。メカニズムは超事實的 transfactual で normic な作用力である。生成メカニズムが生み出す事象は必然的である。ただし、この関係は、実験室などの人為的に構成された閉鎖環境でのみ見いだせる。

③ 経験主義の3大誤謬（認識論的誤謬、原子論的な事象的世界観、経験論的実在論）（それぞれについては後述）

④ 経験論的実在論；実在するものは経験された事象 event であり、世界は経験された事象で構成されているという間違った理解＝actualism。経験主義においては、**経験、事象、法則**の区別ができていない。3つのカテゴリーを混同している。法則は事象連関ではないし、事象は感覚的経験ではない。世界は感覚や経験された世界ではない。経験されない世界が存在する。経験したり感覚したりする人間（主観）が存在していても（自然的）世界は存在する。その世界では、認識されなくても自然法則が存在し働いている。

⑤ open system と closed system：世界は開放システム open system である。多数の因果連関の相互干渉と複合する状況がわれわれの世界である。**重層的多元的因果連関**という世界観こそ正しい。経験主義は、世界を閉鎖システム closed system であるかのように思考しているが、誤りである。constant conjunction が自然界で観測されるのは、天文学など非常に特殊な相対的な近似的閉鎖システムが偶然存立している場合だけである。天文学のような特殊な条件で成立している知識を知の一般モデルにしては

ならない。

- ⑥ **深さの存在論 (depth ontology) ; empirical, actual, real domain の三層の存在位相**
世界は観察される経験的事象だけで存在しているのではない。観察されなくても生起している事象が存在する。現に生起していなくても生起させるメカニズムが存在し、働いている。働いていなくても傾向性として潜在力として存在している事物がある。観察され経験される表層のみを問題にする経験主義を批判。生起する事象のみが存在すると考える actualism も批判。科学は、経験から事象へ、事象から実在へと、つねにより深い次元へと存在論的な推論を重ねる知的活動である。世界は階層的にできている。 **empirical, actual, real domain の存在。**
- ⑦ **実在的因果性、必然的因果性の承認。** 事象生起のメカニズムの存在においてこそ、必然的因果連関の存在が示されている。ただし、open system では、この必然的連関は、直接には現れない。
- ⑧ **原因＝事象を生起させる生成メカニズムの発見こそ科学の仕事**
存在するとは因果的効果を及ぼす力能を有していることである。存在するのは力能、作用力をもった事物である。事物は性質を持つ。その性質を生み出しているのは、事物の内部の構造、生成メカニズムである。性質とは因果的効果能力のことである。科学の仕事は、この生成メカニズムを発見することである。「**実在的本質**」の存在とその「**実在的定義**」の重要性。
- ⑨ **実在性を検証する規準 ; 知覚規準と因果性規準**
何かが実在するかどうかは、知覚や経験も判断基準の一つとはなりうる。しかし、知覚できないが実在するものこそもっとも重要。生成メカニズムなどは通常そのままでは現象せず知覚できないことが多い。また、重力場や量子などは直接知覚できないが実在する。さらに、社会制度や社会システムなどもそれ自体は知覚できないが実在する。では、事物が実在するとはどういうことか、それはそのものなんらかの因果的効果を及ぼす力能を持っているということである (**実在性の因果性規準**)。科学では、直接知覚できない理論上の存在の実在性をさまざまな因果的効果の測定によって間接的にテストしている。経験主義は、実在する事物の因果的性質を理解せずこれを無視したために、存在論の展開可能性を見失っている。
- ⑩ **創発主義 (emergentism) : 構造因果説。** 事物の性質は事物の生成メカニズムである。生成メカニズムは事物の内的関係または構造から創発する。
世界の構造的性、創発的階層性。 世界は、創発的な構造の複雑な多元的階層を形成している。社会は諸個人から、諸個人は生物学的、心理学的構造から創発する。心は物質的な身体構造から創発する。分子は原子から、原子は素粒子から、いずれも構造的に創発する。
- ⑪ **retroduction : 生成メカニズムの発見のための推論**
Deduction (演繹) , induction (帰納) の他に、 abduction, retroduction が重要な推論としてある。 人間の知識の形成においては、上記の 4 種の推論が相補的な関係を

形成している。

しかし、特に、経験主義では見失われてきた後二者が科学的発見においては重要（abduction はパースの概念）である。

バスカーは **retroduction**こそ、現象から実在的本質、構造、生成メカニズムを推論する仮説構成的推論であり、これこそ、科学的推論の最も重要なものであると主張。リトロダクションは、超越論的推論とも重なる論理であり、批判的实在論の科学的発見の論理の中軸をなす。

- ⑫ **帰納主義的懐疑の克服**；観察事実の積み重ねから不変命題は導けないという経験主義のテーゼは、原子論的にとらえられた事象連関の観察から普遍言明を導出しようとする経験主義的な世界観の前提から生じる。しかし、この前提自体が問題である。**retroduction** によって必然的因果連関を仮説的に導出し、テストすればよい。不完全な帰納論理の制約は、**retroduction** と演繹ならびに経験的テストの総合で乗り越え可能である。
- ⑬ **科学の（特に社会科学の）資格要件は、予測能力ではない**。開放システムでは予測は不可能。開放システムを扱う科学では、**説明力こそ科学の試金石である**。→「予測科学」ではなく、「**説明科学**」を提唱。ポパー・ヘンペル理論（皮膜法則 **covering law** と初期条件によって正確な予測ができるかどうかを科学の資格規準とみる）への批判。自然科学では、理論から予測を立て、実験状態を構成して予測の実現をテストする。しかし、社会は特別に解放的な性格を強く持っており、社会科学では、実験状態はつくれない。
- ⑭ **epistemic fallacy（認識論的誤謬）**；近代以降の観念論哲学の根本傾向。経験主義、カント主義はその典型。存在について論ずる知を否定し、存在についてのわれわれの知識についてのみ論じようとする認識論主義。存在についての問いが、常に存在についての我々の認識への問いにすり替えられる。存在論の消去と認識論への閉塞。しかし、いかなる認識論も存在論なしではなりたたない。認識論主義の哲学も常に無自覚的にあやまった存在論を隠し持っている。存在論の隠蔽が科学観と世界観を閉塞させている。哲学は認識論優位ではなく、**存在論優位へ転換すべき**。
存在論＝あらゆる諸事象について、それが世界のなかに存在する在り方を探求する。
- ⑮ **超越論的实在論、科学の認識の超越論的前提を問う超越論的推論から導出**。
実は、①から⑭までの主張はすべて、この超越論的論証にもとづく。
超越論的实在論とは、バスカーの命名にもとづく聞き慣れない名称であるが、その意味は、カントの超越論的観念論の問題構成を实在論的に転換させた哲学的な理論といった意味である。バスカーは、科学が現に成立しているということを前提に、**科学は何をしていてどうして可能となっているのか、そこでは、どのような世界の構造が存立していることが前提となっているのか、という問いから出発している**。しかも、科学の中でも、科学的認識実践の典型である実験科学を分析の対象に据え、「**実験科学はいかに**

して可能か？科学が可能であるためには世界はいかなる構造をもっていなければならないか？」と問う。いわば、科学の存立の超越論的前提条件を問うわけである。バスキアーによれば、カントの超越論的問いには、もともと、存在についての我々の認識の成立のための諸前提を問うという意味があったのだと言う。しかしカントは、結局主観におけるアプリアリな認識論的構図にその条件を求めた。しかし、そうする必然性はなかったのだと考える。カントの方向では、典型的な epistemic fallacy に陥ることになる。

- ⑩ **認識活動の実践性**；超越論的推論では、もう一つ重要な論点が示される。実験科学では、認識主体は受動的観察者ではなく、世界に積極的に介入して事象を生起させている。実験者は行為主体 (agent) である。人間の認識は実践的な行為であり、しかも、道具や実験装置や理論装置、概念などを駆使する。**認識は社会的実践活動 (認識実践 = 知的生産活動) である。**

認識は知識生産労働である。概念は認識のための用具、生産手段である。

- ⑪ **實在論的存在論**；意識から独立[自存的 (intransitive) の対象世界の承認。それと同時に意識に媒介された存在 = 意存的 (transitive) なものの領域 (概念、意味) の承認 (式部訳では、「他動的」、「自動的」)。

- ⑫ **實在論的存在論と認識論的相対主義** (「判断論的相対主義」ではない)。

認識は先行する理論や概念の加工によって対象の認識に接近する。自存的対象 (複雑な構造化された存在) について意存的な認識道具の加工によって認識する活動は、どこまでいっても **絶対的な真理認識には到達できない**。認識は常に可謬的であり、修正と改良の可能性を持ち、相対的である。しかし、この意味の認識の相対主義は対象の自存性を前提とする。そのような相対主義を承認しても、自存的対象を前提にするならば、**対象認識の適合性は問えるし、適合性についてのテストは可能である (認識の適合性について判断できないとする「判断論的相対主義」を否定**。二つの相対主義を厳密に区別すべき)。科学は、対抗する理論相互の比較とより適合度の高い、より説明力のある理論を選択することができる。認識論的相対主義は、歴史的な知識の発展の可能性を許容するものであり、認識の適合度の判断ができないという **判断的相対主義ではない**。

- ⑬ **真理対応説批判**

バスキアーは、真理対応説を経験主義の経験と事象と法則 (認識) の同一視のように、世界を経験一元的に理解する立場とほぼ同一視して批判している。

※これは、バスキアーの行き過ぎではないかと思っている。「事実」概念についても、同様に経験主義の観測データと同じく主観的に構成された現象と同じ意味で定義しているが、問題があると思う。

Cf. Mario Bunge や John Searle は、対応説を肯定、事実概念も経験主義的概念と区別している。

- ⑭ **批判的自然主義**：科学的認識の基本構造は、自然科学も社会科学も深層の生成メカニ

ズムを発見することでは同じ（自然主義）、しかし、社会的存在は、自然存在とは異なる。→自然主義は限界づけられる必要がある。

●存在論的限界：(i) 社会存在の活動依存性、(ii) 概念依存性、(iii) 時間空間依存性（歴史性）

i) 社会は、人間の行為活動によって成り立っている。→構造とエイジェンシーの関係が主題になる。

ii) 社会関係は、行為者によって概念化され解釈された現実として成立している。

→二重の解釈学

iii) 社会は、エイジェントの活動によって、また地理的要因や物質的諸要因や外部環境の変化によって常に歴史的に変化する。したがって、社会的なカテゴリーはその妥当範囲について歴史的地理的限界を持っている。

●認識論的限界：社会構造は直接観察できない。したがって、思考力を駆使した抽象によってとらえる。

社会では、人為的な closed system がつくれない＝実験不可能（閉鎖不可能性）

社会科学は開放システムのなかでの多元主義的な多重的諸要素の複合、コンステレーションの認識になる。

●関係論的限界：認識主体が認識対象に含まれる。認識や理論や科学は社会实践に影響を与え相互に干渉し合う。

⑳ TMS A (Transformational Model of Social Action) 理論；バスカーが提唱。

(M. アーチャーは、バスカーの構想を発展させて Morphogenesis 論を展開)。

いずれも、社会構造の実在性とその因果的力ならびに行為者（エイジェント）の独自の存在性とその創造的因果的力を承認し、相互の関係を理論化する社会存在論を展開。人間の自由と意識的活動性や創造力と社会構造の実在的制約との間の相互関係と変動を理解し説明する理論モデルを提供している。今回は詳論しないが、批判的实在論の社会科学論の中核になっている。

㉑ 社会システムと人間エイジェントの創発：方法論的個人主義と方法論的集合主義を乗り越える。社会システムは諸個人の関係と物質的基礎をから創発し実在する。身体と精神能力をもったエイジェントも創発的に成立した実在物である。諸個人と社会システムはそれぞれ特有の存在性格と因果的能力をもち、相互に関係し影響し合う複雑な関係を結ぶ。社会科学は、この関係を説き明かす必要がある。

㉒ エイジェントとしての人間の主体性と行為能力の承認、同時創発的力の唯物論 (synchronic emergent powers materialism)。心身問題への創発主義的解答 (Bunge, Searle なども参照)。

㉓ 理由の因果性；人間の抱く理由、動機が因果的効果を発揮しうる。理由は、身体をもち因果世界に介入する人間の行為の原因となる。人間の主観（思考、思念、感情な

どの)の理由による因果性＝主体性の承認。多元的・多重的な因果連関が交錯する解放的システムの世界には必然性と偶然性が絡み合っている。世界観としての決定論の拒否と人間の自由の余地の承認。

② 説明的批判 (explanatory critique)

マルクスの資本論(経済学批判、日常的意識のイデオロギー批判、行為と資本主義的システムの同時批判)がモデル。実在的経済関係、イデオロギー的経済カテゴリー、経済活動(日常実践)、経済的諸現象

の4つが内的に関連しあって、誤った物象化的あるいは現象固定的イデオロギーを再生産している資本主義的社会構造全体を批判する。この批判は、日常実践におけるゆがめられた虚偽意識を批判し、それを「科学的認識」としてカテゴリー上で再生産しているブルジョア経済学を批判し、そうしたカテゴリーを現実化させている現象を批判的に暴き出し、さらにその現象の生成メカニズム(資本主義的経済構造)を批判的に分析し、全体的な構造的因果連関を説明する。ここでは、事実の分析と説明が即批判となっており、マルクスでは、事実の批判が価値的批判と結合している。事実の説明的批判である。この説明的批判は、その克服を命じる実践的要請を内包している。

③ 事実と価値の二元論的分断を批判。※この議論も、慎重に検討する余地があると私は考えている。

III. 批判的实在論と学際研究の可能性

① 批判的实在論グループでは、実際に多様な分野の研究者を結集して学際的な研究が進められている。

学問分野としては、哲学、倫理学、社会学、経済学、政治学、法学、心理学、教育学、社会言語学(批判的言説分析)、経営学(組織論)、国際関係論、環境論、平和学、福祉学、保険衛生、看護学や健康学、ジェンダー論などの研究者が参加している。

※具体的な諸研究の一端は、Wendy Olsenが編集した4巻本の *Realist Methodology*, Sage, 2010 参照。

② なぜ、学際的な研究が可能になっているのか？

以下はあくまで私見。

- i) 批判的实在論が提供する哲学、科学のメタ理論そのものが、さまざまな分野の研究に指針を与える役割を果たしている。
- ii) 社会における人間の存在論的位置や多元主義的世界観や多元的因果性理解、生成メカニズム、創発主義、構造とエンジェンシー、必然と偶然など、これまで一貫した明晰な理論化がなされてこなかった問題に存在論的、認識論的な説明を与え、応用可能な形で提示している。
- iii) 主観主義や観念論的な知識論では、実際に行っている科学研究の意味を説明で

きない。ただ、これまで、きちんとした実在論的な科学論が無かったために、あいまいなまま、ポストモダニズムや現象学や経験主義に依拠し、主観主義や相対主義的説明に寄りかかってきた。しかし、それらは科学的認識努力の真相を言い当てていない。批判的実在論には、これまで正面きった明確な批判がなされてこなかった近代認識における epistemic fallacy という問題を克服する道が示されている。

iv) 批判的実在論は、**科学の下働き役 (under-laborer)** を果たすことを目指している。批判的実在論は、具体的な研究方法にたいして批判的な判断指針を与えるメタ方法論を提示している。

③以下は、Berth Danermark et.al. (eds.) *Explaining Society*, Routledge, 2000. で示された批判的実在論の社会科学の研究手法へ指針の概略 (その一部) である。

i) 批判的実在論は、これまで決着がつかないままになってきた多くの論争における二元論を克服できる。たとえば、哲学と科学、存在論と認識論、心身二元論、実在論的存在論と認識論的相対主義、普遍性と具体性 (帰納問題)、理論と経験研究、解釈学と法則科学、必然と偶然、量的調査研究と質的調査研究 (内包的、外延的研究と名称を変えて統一する) などなど。

ii) 科学を実践ととらえることがもたらす意味; 認識主体の存在論的位置づけ、認識論的相対主義、エンジェンシー、人間の自由。

iii) 一般化、概念構成、構造分析、因果分析などの認識の構造と存在論的な世界構造 (三つの存在領域、階層性、構造、開放システム) との連関の把握が研究にもたらす指針的効果。概念とは何か、抽象はなぜ必要か、理論とは何か、科学の目的は何か、経験研究と理論はどのように結びつくか、などが、科学研究の前提的な体系的な構造を持った知として意識的理論的に位置づけられている。

※これらは、批判的実在論がさまざまな研究分野の研究に指針をあたえるという点で、魅力となっているものと思われる。学際研究の前提に、共通の存在論的な世界理解がある。

◆批判的実在論と学際研究の可能性は、以上である。基本は、共通の世界構造の認識が方法論的な基本原則の共有を促しているということであろう。

◆今回は、批判的実在論の問題点については、論じない。私的には、いくつか乗り越えるべき問題点があると考えているが、まだ、それらの論点の検討が未成熟な段階にあり、発表は控えたい。

■ 批判的実在論に関する主な文献

<基本文献>

Roy Bhaskar, *A Realist Theory of Science*, Verso, 1975

(式部信『科学と実在論』法政大学出版局、2009年)

The Possibility of Naturalism, Verso, 1979.

(式部信 訳『自然主義の可能性』晃洋書房, 2006)

Scientific Realism & Human Emancipation, Verso, 1986

Reclaiming Reality, Verso, 1989

その他、バスターには多数の著書がある。

<主要な研究者とその著作>

Margaret Archer ; 社会学 (現在スイス連邦工科大学、ローザンヌ校で Center for social ontology を主催、元国際社会学会会長)、

Realist Social Theory – the morphogenetic approach, Cambridge Uni.Press, 1995 (拙訳『实在論的社会理論—形態生成論アプローチ』青木書店 2007年)

Andrew Sayer (社会学 Lancaster 大学)

Method in Social Science, Routledge, 1992

A. Sayer, *Realism and Social Science*, Sage, 2000

Tony Lawson (経済学 Cambridge 大学)

Economics and Reality, Routledge, 1997

(八木紀一郎監訳 『経済学と实在』日本評論社、2003年)

Alan Norrie (法学 Warwick 大学)

Crime Reason and History, Butterworth, 1993

Andrew Collier (哲学 Southampton 大学) ,

Critical Realism – An introduction to Roy Bhaskar's Philosophy, Verso, 1994.

Christopher Norris (Cardiff 大学) : デリダ研究で有名。著書多数。

Dave-Eider Vass (社会学 Loughborough 大学)

The Reality of Social Construction, Cambridge Univ. Press, 2012.

この他 ; 政治学 : B. ジェソップ (ランカスター大学)

批判的言説分析 : N. フェアクラフ (ランカスター大学)

環境思想 : T. ベントン (エセックス大学)

国際関係論 : H. パトマキ (ノッティンガム大学) など。

<入門書>

Justin Gruickshank(ed.), *Critical Realism*, Routledge, 2003

Berth Dannermark, Mats Ekstrom, leiselotte jakobsen, Jan Ch. Karlson,

Explaining Society – Critical realism in the Social Sciences, Routledge, 1997

<論文集>

M.Archer, Roy Bhaskar, Andrew Collier, Tony Lowson, Alan Norrie(ed.) *Critical Realism – Essential Readings*, Routledge, 1998

Clive Lawson et al, (eds.), *Contribution to Social Ontology*, Routledge, 2007.

Wendy Olsen (ed.) *Realist Methodology*, Vol. I、II、III、IV、Sage, 2010.

<辞書>

Mervyn Hartwig ed. *Dictionary of Critical Realism*. Routledge, 2007

<その他>

Roy Bhaskar with Mervyn Hartwig, *The Formation of Critical Realism: A personal perspective*, Routledge, 2010. 対談型でバスキアの思想遍歴をたどったもの。

以上

.....

② 松田亮三 (担当教員)

※以下、松田担当教員による報告書を載録する。

.....

対人支援研究における批判的实在論の活用例—医療・福祉を中心に

松田 亮三 (立命館大学・人間科学研究所/産業社会学部)

1. はじめに

対人支援分野の研究は、「誰・何をどう支援するか」という主題に関わる研究が多く、支援をどう研究するかという方法論についての検討、特に科学哲学をふまえた検討については未だ多くの課題が残されている。西欧諸国において提唱されてきた「根拠にもとづく実践(evidence-based practice, EBP)」¹概念が我が国においても議論されている中で、こうした方法論の検討は理論的にも実践的にも重要な意味を持ちつつある。

EBPを検討し普及してきたソーシャル・ワークの研究者、Haluk Soydanは、「対人援助は、組織構造と科学的根拠にもとづき、専門機関によって実施され、専門家集団により提供される。対人援助は、健康問題、行動上の問題、社会問題を予防し、取り扱うために、人間や社会に向けて実施されるものである。」(Haluk Soydan 人間科学研究所総会講演スライド 2014年1月25日)としたうえで、以下のように述べている。

「エビデンスに基づく実践は、専門家の技能を伴った最善の科学的根拠と、特定の組織

¹ 日本では、EBPの概念は2000年以降に導入・検討されている。特に、医学分野では関心が高く普及した概念ともなっているが、福祉・教育分野では、一定の議論の蓄積はありつつも、さほど普及していないように思われる。また、概念は普及しているものの、実践場面でどのように実施されているかは、別途検討が必要と思われる。

的・文化的な場における、個々のクライアント（または集団、コミュニティ）の価値、伝統、選択を統合したものである。」(Haluk Soydan 人間科学研究所総会講演スライド 2014年1月25日)。では、対人援助・支援での「最善の科学的根拠」とはなんであるのか？それを得るために、私たちはどのように考えていくべきなのであるのか。

例えば、米国カリフォルニア州に拠点をおき、子どもの福祉についてのエビデンスを収集・分析・普及している California Evidence-Based Clearinghouse for Child Welfare(CEBC)は、エビデンスの評価基準として、「1 非常に支持される介入」から、「5 (危害が) 懸念される介入」までの5段階の基準を設定している。確実な介入として評価される「1」の部区分には、無作為割り付け試験(Randomized controlled trial, RCT)が2つ以上、査読付き雑誌に掲載、RCTでの効果が、少なくとも1年以上持続、という条件を満たしている介入が掲載される²。対人援助において、こうした無作為割り付け試験の重視は、正当化されるものであるのか？そして、正当化されるとすればどのような意味においてであろうか？

さらに、コミュニケーション手段の発達により、文化を超えた支援方法の移転性(transportability)についての関心が高まっていることは、エビデンスの理解についての新たな論点を投げかけている。例えば、心理的うつ予防・治療対応 カナダで開発された方法を日本に導入できるか、日本で開発された引きこもり者支援法が、韓国で導入できるか、などのアイデアに対して、①そもそもそのような移転は可能なのか、②可能とすれば、移転しているときに、実のところ何が起きているか、③その際生じている移転をどのように説明するか、④移転を成功させるにはどうすればいいか、その場合の成功とは何か、という課題が直ちに普及してくる。このような移転可能性は、社会内における少数者・多数者の生活・文化的差異をどう考えるか(人間科学研究所におけるパネルディスカッションでのSoydan氏の指摘)にもかかわっている。

本稿では、このような対人援助領域における方法論の課題について、批判的实在論はどのように活用されているのかについて、先行研究の状況について予備的に検討した。

2. 批判的实在論と対人援助—先行研究より

批判的实在論を用いた対人援助研究は、未だ端緒についたばかりであり、国際的な学術データベースを用いた検討を行う必要がある。このようなデータベースには数多くの種類があるが、看護領域から検討することとし、2014年01月29日にPubMedにて、“critical realism” or “critical realist”により検索を行った。この結果73件が適合した。それら論文の抄録を点検し、批判的实在論に直接関連すると思われるものを選択し、実際に読み込みながら検討をすすめた。なお、本稿はこの検討過程において作成しているものであり、経過報告であることをお断りしておく。また、用手検索、日本語データベース、心理関係データベースについては、今後実施する予定である。以下、特徴的な点について記載する。

² CEBCのウェブサイト <http://www.cebc4cw.org/> の記載による。2014年1月閲覧。

まず、議論が盛んなのは看護系である。Nursing Inquiry 誌が 2012 年に特集を組んでおり、そこには以下の論文が掲載されている。

1. Angus, J. E. and A. M. Clark (2012). "Using critical realism in nursing and health research: promise and challenges." Nurs Inq 19(1): 1-3.
2. Pawson, R. (2012). "Realist thoughts on Cinderella, Alice in Wonderland and health care interventions." Nurs Inq 19(1): 4-5.
3. Nairn, S. (2012). "A critical realist approach to knowledge: implications for evidence-based practice in and beyond nursing." Nurs Inq 19(1): 6-17.
4. Porter, S. and P. O'Halloran (2012). "The use and limitation of realistic evaluation as a tool for evidence-based practice: a critical realist perspective." Nurs Inq 19(1): 18-28.
5. Harwood, L. and A. M. Clark (2012). "Understanding health decisions using critical realism: home-dialysis decision-making during chronic kidney disease." Nurs Inq 19(1): 29-38.
6. O'Brien, T. and S. Ackroyd (2012). "Understanding the recruitment and retention of overseas nurses: realist case study research in National Health Service Hospitals in the UK." Nurs Inq 19(1): 39-50.
7. Sword, W., A. M. Clark, et al. (2012). "The complexity of postpartum mental health and illness: a critical realist study." Nurs Inq 19(1): 51-62.
8. Tolson, D. and I. Schofield (2012). "Football reminiscence for men with dementia: lessons from a realistic evaluation." Nurs Inq 19(1): 63-70.
9. Cruickshank, J. (2012). "Positioning positivism, critical realism and social constructionism in the health sciences: a philosophical orientation." Nurs Inq 19(1): 71-82.
10. DeForge, R. and J. Shaw (2012). "Back- and fore-grounding ontology: exploring the linkages between critical realism, pragmatism, and methodologies in health & rehabilitation sciences." Nurs Inq 19(1): 83-95.

また、疫学でも若干議論がされている。

時期的にみると、2000 年代前半から関心が広がり、この数年は成果の数が増えている。批判的実在論の説明には、バスカー、アーチャー等、主要な論者の文献が用いられている。論文の内容としては、当該分野の研究の特性をふまえた理論的検討と研究実践の両方がある。このことは、批判的存在論にもとづく具体的研究は、対象の性質に合わせて多様なものがとりうるし、とられていることを示している。

方法論的な検討として EBP に関わって注目されている概念として、Realist review (あるいは synthesis)がある。これは、Pawson の realistic evaluation の展開として提唱されて

いる「理論にもとづく評価(theory-driven evaluation)」の一つであり、Greenhalgh によれば、理論と実践作用の両方を吟味することが求められる。

“Realist review exposes and articulates the mechanisms by which the primary studies assumed the interventions to work (either explicitly or implicitly); gathers evidence from primary sources about the process of implementing the intervention; and evaluates that evidence so as to judge the integrity with which each theory was actually tested and (where relevant) adjudicate between different theories”³.

なお、Pawson は、以下のように文脈とメカニズムの組み合わせを熟慮することによる組織学習への効果を述べている。

“Realist review supplements this approach to organizational learning by thinking through the configurations of contexts and mechanisms that need to be attended to in fine-tuning a programme. We believe that the stage is set for developing explicit linkages between realist reviewers and contemporary initiatives in organizational development in the health services.”⁴

このような議論をふまえて、疫学者の Eastwood は、实在論者的説明理論構築法(Realist explanatory theory building method)を提唱している⁵。これは、社会疫学領域において、実証研究は進展しているものの、そこで理論の貧困を克服するために作成されたものであり、1) emergent phase, 2) construction phase, 3) confirmatory phase という3つの段階から、理論構築を行っていくとするものである。

具体的な研究実践例としては、ナイジェリアの喫煙者への critical ethnography (参与観察、深層インタビューなど)(Oladele 2013)、犬の散歩の運動への意義 (既存文献の総合) (Toohey and Rock 2011)、認知症ケア・ワーカーの作法 (グループ・インタビュー等) (Kontos et al. 2011)、など多様なものがある。

³ Greenhalgh, T., et al. (2007). "Realist review to understand the efficacy of school feeding programmes." *BMJ* 335(7625): 858-861.

⁴ Pawson, R., et al. (2005). "Realist review – a new method of systematic review designed for complex policy interventions." *Journal of Health Services Research & Policy* 10(suppl 1): 21-34.

⁵ Eastwood, J. G., et al. (2014). "Realist explanatory theory building method for social epidemiology: a protocol for a mixed method multilevel study of neighbourhood context and postnatal depression." *Springerplus* 3: 12.

3. 今後の課題

本稿では、既存文献の検討をもとに、批判的实在論の検討が医療・福祉領域でどのように活用されているかを予備的に考察した。なお、本稿では社会福祉領域、犯罪学等の周辺領域での文献が検討できていない。また各論文を詳細に検討する前の作業として、特徴的な点を把握したに過ぎない。今後“Critical realism”の適切な理解と運用がなされているのかという視点からの検討、具体的な分野による展開の特徴の整理、方法論的展開の特徴、実際の研究への活用、エビデンス論との関わりなど、多くの課題が残されている。それらの作業をふまえて、今後どのように対人援助研究に、批判的实在論が貢献しうるのか、そのためにどのような枠組みが有効か、検討していきたい。

③ 加藤雅俊（担当教員）

※以下、加藤雅俊（担当教員）の報告書をそのまま転載する。

.....

政治学における批判的实在論の可能性

ーボブ・ジェソップを手がかりとしてー

加藤雅俊

他の社会諸科学と同様に、現在の政治学では、経験主義や実証主義に依拠した従来の学問のあり方に疑問が呈され、刷新を求める動きが生じている。そもそも政治学では、1950・60年代にアメリカで「行動論革命」が生じて以来、実証主義の影響力が強かった。行動論革命とは、それまでの研究の多くが政治制度の静態的記述にとどまっていることを批判し、観察可能な証拠に基づいた科学的な政治学の確立を求める学問動向を指す。行動論的な政治学はさまざまな点で批判を集めたが、重要な点は、批判者も実証主義を継承していることにある。例えば、行動論が観察可能な政治主体の行為に注目し、国家機構や政治制度の果たす役割を軽視していることを批判した「国家論や新制度論」も、制度と政治主体の相互作用を、観察可能な証拠に基づいて証明しようとする。一方、行動論が分析のミクロ的基礎を欠いている点を批判し、政治主体の合理性を前提に分析を行う「合理的選択論」も、自らの仮説の妥当性を、観察可能な証拠によって証明しようとする。言い換えれば、現在の政治学の主流アプローチは、行動論を批判することで自らの理論的有意性を主張する一方で、実証主義という要素を継承しているのである。

しかし、近年の政治学では、実証主義では複雑な政治現象を分析できないとして、その理論的妥当性を問い直す動きが生じている。例えば、制度それ自体ではなく、政治主体がどのように解釈したかに注目する「解釈主義」、特定の制度状況における政治主体の言説を通じた相互行為に注目する「言説的制度論」などがある。

その中でも特に注目に値するのが、「批判的实在論」に依拠した政治分析の試みであ

る。ここでは、「社会科学としての政治学」の哲学的基礎を問い直し、政治現象の構造把握と因果性を解明することが模索されている。その論者の一人が、マルクス主義的な社会学者として著名なボブ・ジェソップ (Bob Jessop) である。ジェソップは、政治学における制度への注目が、分析の出発点やテーマとしての制度の重要性に注目しているにすぎないとして、その不十分性を指摘する。その上で、分析の対象である政治や社会の存在論に立ち戻り、理論枠組を刷新する必要性を指摘し、「戦略・関係論的アプローチ」を提示する。このアプローチは、特定のバイアスを持った構造を、戦略を通じて主体的に解釈するアクターが相互行為を行う結果、次の時点での構造および戦略へとフィードバックされていく過程として、構造と主体の相互作用を捉える。言い換えれば、政治現象は戦略を媒介とした構造と主体の相互作用における時間的連続として分析されることになる^{*i}。したがって、政治主体の戦略を理解し、それがどのように実現し、既存の構造を変容（もしくは再生産）させたかを解明することが分析者の課題となる。そのため、観察可能な行為だけでなく、主体がそれにどのような意味を込めていたかなどについても、検討されることになる。

このように、現代政治学では、実証主義の哲学的基礎を再検討する中で、メタ理論の重要性が再認識されつつある。批判的实在論に依拠した政治分析は、その中でも重要な位置を占めている。しかし、このアプローチに依拠した政治学の構築はまだ発展途上の段階といえる。したがって、今後は、①主流アプローチとの批判的対話を繰り返すことによって、自らの有意性を示すこと、②既存の政治学が蓄積してきた理論的知見を、批判的实在論という観点から再構成することなどが求められている。実証主義の理論的基礎を問い直す批判的实在論は政治学のメタ理論として大きな貢献をなすことが期待されるが、そのためには既存の政治学との結びつきを明確にすること（言い換えれば、政治学の研究蓄積の到達点と課題を明確にし、批判的实在論がどのような点で有意性を持つかを示したうえで、先行研究の知見を批判的实在論の観点で再構成すること）が求められる。先進プロジェクト研究では批判的实在論の基礎を学ぶことによって、上記の作業に貢献していきたい。

*i戦略・関係論的アプローチは、コリン・ヘイ (Colin Hay) によって批判的に継承される一方で、近年のジェソップは自らのアプローチを「文化的政治経済学」として刷新している。彼は、その特徴を、①歴史・制度の重要性を重視する、②意味と実践の関係の複雑性を重視する、③記号的 (semiotic) プロセスと記号外的 (extra-semiotic) プロセスの共進化に注目し、資本主義形態の構成とダイナミズムへのそれらのインパクトを重視する、アプローチとして整理する)。

.....

④野村優（受講生、博士後期課程2回生）

※以下、受講生野村優の研究報告書をそのまま載録する。

.....

先進プロジェクト研究(SH) 報告書

「批判的方法論的多元主義」について

立命館大学大学院 社会学研究科 博士後期課程二回生
野村優

本プロジェクト研究は、実在論的な視点を基盤としながら、これまでに無かった社会科学論と社会科学方法論を展開している、批判的実在論を研究テーマとしている。なかでも、本報告書においては、プロジェクト研究において輪読を行っている Berth Dannemark らによる”*Explaining Society: Critical realism in the Social Sciences*”に示された内容から、とくに批判的実在論が提唱する「批判的方法論的多元主義」(Critical methodological pluralism) について取り上げて報告する。

批判的方法論的多元主義を提唱するに至る論点の所在

社会科学の実施にあたっては、ときに定量的方法と定性的方法が区別されることがある。一方の定量的方法とは、質問票による一定数のデータなどを利用して得られる、全体としての趨勢に重点を置いた研究方法である。そうして、そうした定量的方法においては、しばしば統計的な因果分析や変数解析、数学が中心的な役割を担う集合体概念の使用、そしてなにより経験的な観察に優先権が与えられるという特徴がある。対して、定性的方法とは、フィールドワークによる参与観察などを実施することによって、あるケースにおける特徴的な個別の性質に注目して行われる研究方法である。こうした定性的な方法は、現象学や解釈学を基礎として個別主義的、記述的、発見的、ヒューリスティック、帰納的なやり方で、特定のケースにおける理解を目標として行われることを特徴とする。そして、こうした二つの方法は、どちらの方法が優れているかが議論されることなどによって、対立するものとして把握されてきた。

しかし、批判的実在論が主張する立場は、こうした二つの方法を互いに排他的な位置にあるものとするのではなく、双方を組み合わせる社会科学を行うことが有益であると考えた。つまりは、定量的方法と定性的方法の両方ともが必要であることを批判的実在論は主張している。そして、彼らはこの立場のことを「批判的方法論的多元主義」と表現しているのである。

ただし、ここで、さらに論点を明確にするためにより詳しく述べておくと、批判的実在

論が提唱する「批判的方法論的多元主義」は、ただ定量的方法と定性的方法を組み合わせる必要があるということを主張するだけのものではない。そうして双方の方法を混合させて社会科学を行うことであれば、既に一般的にも行われていることを彼らは知っている。しかしながら、そうしたこれまでの「混合方法論」は、不十分であると彼らは考えているのである。

以上のことから、彼らが「批判的方法論的多元主義」を主張するとき焦点になるのは、「定量的方法と定性的方法のどちらが優れているか」でも「定量的方法と定性的方法を組み合わせるべきかどうか」でもなく、「どのように定量的方法と定性的方法を組み合わせるべきなのか」ということが明らかになった。そして、双方の方法を組み合わせるときには、批判的実在論のもっている「存在論的基盤」を踏まえたいうえで行われるべきだということが、批判的方法論的多元主義の主張の骨子となっている。

批判的実在論における「存在論的基盤」について

それでは、ここで批判的実在論が提唱する存在論的基盤がどのようなものであるかを簡潔に説明しよう。その特徴をもっとも簡潔に述べるのであれば、批判的実在論の基盤においては、「実在」の中に三つの領域 (domain) からなる構造が見いだされていることである。

批判的実在論において想定されている、実在の一つ目の領域は、「エンピリカル・ドメイン」 (empirical domain) である。これは、ある出来事が起こるだけでなく、それがさらに認識されること、つまりは、経験されることに対応する。たとえば、実験などにより確かめられた事実は、エンピリカル・ドメインに含まれると考えられている。

つづいて、批判的実在論が考える「実在」の二つ目の領域は、「アクチュアル・ドメイン」 (actual domain) と呼ばれている。そもそも単純に考えてみても、実際に起こった出来事の全てが、常にある観察者によって認識されているとは限らない。つまりは、たとえだれかによって経験されていないことであっても、現実には起こっていると考えることができる。そのために「経験されたかどうか」とは異なって、「起こった」という次元においても実在世界をとらえることができる。つまりは、こうした「起こった」という契機によって把握できる実在世界こそがアクチュアル・ドメインである。さらに、「起こっていない」ことが「経験される」こともないので、アクチュアル・ドメインはエンピリカル・ドメインを包含する構造になっていると考えられる。

さいごに、批判的実在論によって、三つ目の「実在」の領域として考えられていたのが「リアル・ドメイン」 (real domain) である。この想定的前提となっているのは、ある出来事が「起こる」背景には、つねになんらかの因果的な生成メカニズム (mechanism) が働いていると想定することである。

しかしながら、ある因果的な生成メカニズムがあるからといって、必ず「起こる」とわけではない。たとえ、あるメカニズムが働いていたとしても、それとは別のメカニズムが

働いていたとすれば、それらが打ち消し合ったりされることによって、必ずある生成メカニズムの作用が現れるとは限らないと彼らは考えるのである。そして、批判的实在論においては、こうして多くの生成メカニズム同士が複雑な関係で作用し合っている現実のありかたを「開放システム」という用語で表現されている。そうした開放システムである現実においては、物事が起こらなかったということが、その背景に生成メカニズムが存在しなかったということの意味しない。つまりは、何かは「起こった」というレベルとは区別して、何かを「起こす仕組み」についてあつかうことができる。そのために、「起こった／起こらない」という契機とは独立させて、出来事を起こすメカニズムを扱うリアル・ドメインが設定された。また、何かが起こるときには必ず因果メカニズムが働いていると考えられるので、全てのアクチュアル・ドメインは、リアル・ドメインの中に収まると考えられる。

以上のように、エンピリカル・ドメイン、アクチュアル・ドメイン、リアル・ドメインという三つの領域に分けたうえで「实在」をとらえることこそが、批判的实在論の「存在論的基盤」の要点である。その三つの領域の関係を、簡潔にまとめておくと次のようになる。もっとも深い实在のレベルにおいては、現実には物事を起こす生成メカニズムによるリアル・ドメインの次元がある。そして、それが「起こる」かどうかという契機によって、アクチュアル・ドメインが区分される。さらには、アクチュアル・ドメインのうちで、観察された出来事のみがエンピリカル・ドメインにおける实在をかたちづくとされていた。このように、批判的实在論においては、実在世界は構造を持ち階層化されていると考えられていた。そして、そのことが「存在論的基盤」と表現されていたわけである。

「批判的方法論的多元主義」について

さて、ここで話を社会科学の方法論にもどすと、こうした存在論的基盤を踏まえて定量的方法と定性的方法を組み合わせて社会科学を行うべきだという主張こそが「批判的方法論的多元主義」の立場であった。

こうした批判的实在論にとっては、定量的方法を重視する立場は、ある人物たちによって経験された内容によって实在をとらえようということにあたる。つまりは、定量的な方法とは、エンピリカル・ドメインをあつかうものであった。また、定性的方法は、最大限に広く受け取っても、アクチュアル・ドメイン、つまりは、実際に起こったあるケースについての理解だけを目的としている。以上のように、階層化された实在概念を基盤とする批判的实在論にとっては、定量的方法も定性的方法も、实在の一部についてしか取り扱っていないものであった。

さらには、定性的方法と定量的方法の両方を使うだけの「混合方法論」に対しても、同世の批判が行えるだろう。つまりは、単純に両方の方法を足し合わせて使うだけでは、双方の方法がカバーしていないリアル・ドメインについては、明確に扱うことができていな

い。それらとの対比として述べるのであれば、批判的実在論は、より幅広い領域であるリアル・ドメインに対する配慮も含まれており、実在の全ての領域を取り扱えるという大きなアドバンテージをもつものであった。

さらに「批判的方法論的多元主義」は、扱える実在の範囲を広げるだけでなく、社会科学が目的とすべきことに対しても変更を迫るという意義を持つと考えられる。これまでの社会科学では、定量的な研究においては社会的現象が起こったときの法則を導き出すこと、定性的な方法においてはあるケースに即して理解をすることが目標とされてきた。しかしながら、批判的実在論においては、リアル・ドメインも含めたうえで、社会という実在のメカニズムを説明することが目的とされる。それが、「起こる／起こらない」ではなく、また「経験される／されない」でもなく、より本質的な次元で社会という存在の仕組みを、根本的などころから解明することが目指されるのである。

以上のように、批判的実在論においては「批判的方法論的多元主義」の立場を踏まえて、社会科学が行われるべきであると考えられていた。そして、その主張は、社会科学があつかうことのできる実在という概念の範囲を押し広げ、さらには社会科学が目指すべき役割を明確化するという二つの点で、大きなアドバンテージをもつものであった。

.....

⑤中澤平（受講生、博士前期課程2回生）

※以下に、中澤平（受講生）の研究報告書をそのまま載録する。

.....

先進プロジェクト研究 2013 年度研究報告

中澤 平

——批判的実在論における実在と概念、および実践——

この先進プロジェクト研究で扱った文献「Explaining Society」のなかで興味深い論点の一つとして、実在世界と概念世界との相互区別、および実在と概念を媒介するものとしての実践という論点があった。この論点はとりわけ「Explaining Society」の中の第二章「科学、実在および概念」で詳しく論じられている。批判的実在論のひとつの眼目は、存在論と認識論を区別することにあると思われるが、この問題の基本的なところが、この第二章で展開されているように思われる。ここではこの論点を切り口に批判的実在論の理論に迫っていきたいと思う。

さて、まず実在世界と概念世界がそれぞれ区別されるべきものであり、それぞれが独自のものとして存立しているということがこの議論の前提になっている。たとえば、地球がどのような形をしているのかを人間がどのように認識しているのか——どのような「地球」

の概念をもっているのか——という問題と、現実には地球はどのような形をしているのかという問題とは、まったく別の問題なのである。そして、このような問題について人間がどのような認識をもっていたところで、この認識それ自体は実在に作用することはない。認識や概念と、実在世界とは相互に区別されるべきなのであり、それ自身の論理で動いているのであるから、一方を他方に還元したりすることはできないのである。この点について批判的実在論はどのような論証を行っているのであろうか。まず、日常的な経験からみれば、われわれ人間は間違いを犯しうるということが実在の自律的存在の根拠として挙げられる。もし、実在が我々の知識から独立した世界でないとすれば、もし実在が我々の概念世界と同じものならば、「意図せざる結果」などというものは起こりえない。すべては我々の意図したとおりにいくはずであり、すべては我々の予想した通りの結果になる。たとえば、もしわれわれが空を飛びたいと思うならば、あるいは水の上を歩きたいと思うならば、——実在の自律的メカニズムからくる制約などないのだから——我々は空を飛べるはずであり、水の上を歩けるはずである。このことはこうした物理世界に関するのみならず、社会的世界に関するも同様のことが言える。もし「自由な生活」を送りたいと思って、そこにある社会的世界のさまざまな規範や他者の反応を無視して自らの願望通りにふるまえば、他者の思わぬ反応に出くわして、逆に自らの期待したこととは反対の結末——それは当初かれが予想だにしなかった結末——、たとえば刑務所暮らしという結末に陥りかねない。

また、こういったやや皮肉を交えた論証も挙げられている。もし、世界が我々の観念の中のみあるものだとすれば、その世界には我々の知り合いしかいないと。もっと言えば、それらの知り合いはすべて我々の期待通りに行為し、我々の予想を裏切るようなことはしないし、当然我々の行為にたいして反発したり拒絶したりすることはないとも言えるだろう。

もちろん、我々は空を飛ぶことは出来ないし、水の上を歩くことも出来ない。また他者はしばしば我々の期待通りには行為せず、むしろ我々の理念や行為に対して反発することさえある。自らの行為が自らの意図に反した結果をもたらすなどということは日常的経験に属する。このことから実在は——自然実在であれ、社会的実在であれ——我々の観念や概念世界に還元できるようなものではなく、むしろそれ自身の自律的メカニズムをもっており、またその自律的メカニズムを我々が知っているとは限らないということが明らかとなる。

しかし、批判的実在論が面白いのは、ただ実在世界と概念世界とを区別するというだけにとどまらず、人間のもつ多様な概念や認識が実践を通して実在に作用するという連関や、また——これは当然のことだが——人間の認識とても決して実在世界から無関係に形成されるわけではないという連関にせまるころにあると言えるだろう。まず、認識は実践という媒介を通して実在に作用するのである。たとえば、地球が丸いという認識は、冒険者

たちを航海へと誘い、それはやがてヨーロッパの植民地支配につながり、さらにその結果として産業化が促進され、やがて近代世界というあらたな社会的世界がうまれるためのひとつの引き金となったのである。またこの認識が實在に作用するというのは何もこういった社会的實在に対してのみであるということではない。自然的實在に対してすら人間の認識は作用する。たとえば今日の公害問題や環境問題はこのことのもっとも明らかな例証である。ある認識に基づいて人々がある実践を行うとき、自然的世界は人々の実践から作用を受け、変化し、またひいては人々に反作用する。このことから明らかなように、實在は人々の実践を通して変化する。というより、そもそも人間の実践それ自体が實在世界の一部なのである。そして人間の実践の基底にあり、一要因となっているのは認識であり、諸々の概念なのである。たしかに認識や概念それ自体が實在に直接影響を与えるわけではない。けれども、認識や概念といったものは、それが人々の実践に組み込まれることで、實在に——間接的に——影響を与える。つまり、實在世界と概念世界とはそれぞれ独自のものであり、相互に区別されるべきものでありながらも、けっしてお互いに全く何の影響も与え合うことのない、完全に分離された世界だというわけではないのである。むしろ相互に影響を与え合っているのである。こうした緊張関係に焦点を当てることが批判的實在論のひとつの論点になっているように思われる。

ここで、こういった實在と知識との緊張関係という問題を考えるに際して批判的實在論が出発点にとるのは、科学という実践的営為である。批判的實在論は次の問いからはじめる。すなわち科学の存立が可能であるためには、實在はどのようなものでなければならぬか、という問いである。批判的實在論は科学という認識活動をひとつの実践としてみる。

(まさしく實在と概念世界を媒介するものとしての実践という、先に見た論理がここでも当てはまるのである。) たとえば科学のもっともありふれた手段である実験とはいったいどのような営為であるのか。批判的實在論によればそれは、實在に介入するという実践である。なぜ、介入するのか。それはそうしなければ認識できない實在の領域——批判的實在論の用語で言えば、實在のドメイン[real domain]——があるからである。實在が我々の認識に対して常にオープンであるというのは誤りであって、したがって単なる観察によって認識できるものではないのである。だからこそ、実験が必要になるのである。もし「存在しているものすべて」が開かれており、實在が「透き通ったもの」であるならば、実験など必要ないし、そもそも科学それ自体の必要性が無い。なぜなら、科学という実践を遂行するまでもなく、實在はすでに認識されたも同然のものであるから。この科学という実践が存在しているということからも、實在が我々の認識や概念からは独立して存在しているということ、またわれわれが實在しているものについて認識しているとは限らないということが結論づけられる。とはいえ、實在は我々の認識から切り離されたものであり、したがって我々の認識は永遠に實在に到達できないというわけではない。まさしく科学という実践こそが我々の認識・概念世界と實在世界を媒介するものであって、——たとえ絶対的

な真理なるものではないにしても——科学という営為によって我々は真理に近づくことができるのである。

おわりに

今回は「*Explaining Society*」のとくに第二章から、存在論と認識論に関わる批判的实在論の基本的な考えをみてきた。实在と人間の認識との間の複雑な連関が明晰に整理されていると言えるだろう。批判的实在論独自の存在論にもとづいた諸々の議論、とくに科学論には学ぶ点が多い。また複雑な社会的現実を理解するにあたって、批判的实在論の議論を検討することは、非常に有効であると思われる。今後も継続して学びたい。

参考文献

・ Berth Danermark, Mats Extröm, Liselotte Jakobsen, and Jan Ch. Karlsson ,
Explaining Society: Critical realism in the social sciences ; Routledge, 2002.

.....

⑥大月功雄（受講生、修士課程2回生）

以下に、大月功雄君の研究報告書をそのまま載録する。

.....

【先進プロジェクト研究報告】

批判的实在論の現代社会学への応用可能性について

2014.2.25 大月功雄

本稿は、先進プロジェクト研究で検討を進めてきた「批判的实在論 (critical realism)」について、当学派の中心人物であるR・バスカーの『自然主義の可能性』(1979=2006)を手がかりにして、本研究を通じて明らかになった批判的实在論に基づいた現代社会学への応用可能性について論じる。とりわけ今回は「批判的实在論」を実証主義への批判の文脈のなかに位置づけることによって、その社会学的意義を確認したい。

バスカーは科学と哲学の関係について、「哲学は決して科学に解消されない。むしろ哲学は科学にとって必要不可欠の要素である」[Bhaskar 1979=2006:i]と述べている。このことは、近代化のなかで「科学」がその領域をあらゆる分野へと拡大しつつあるなかにあっても、その科学自体の存立条件について問うという「哲学」固有の役割がなくなりはないということを意味している。バスカーなどが展開する「批判的实在論」とはまさにここでいう「哲学」の役割、つまり、「科学」(自然科学・社会科学をともに含む)の成立条件について实在論的に基礎づけ直す役割を担っているのだと言えよう。

このバスカーの「批判的実在論」の役割を、ここでは今日の社会学においても主流となりつつある「実証主義」への批判的文脈で確認するならば、例えば、実証主義のような経験科学がほとんど自明なものとしている「実験」に基づく因果法則の発見という設定自体を存在論的に問うこととなる。彼は、「実験」という空間で引き出される因果法則は、あくまで他の関係領域から「閉じたシステム」内で現れる一つの因果法則に過ぎないという。また、社会科学においては「実験」という空間が設定できず、「社会」という対象自体が様々な関係機制が働いている「開放システム」をその条件としているにも関わらず、そこで経験的に得られた因果法則を普遍化してしまうところに「実証主義」の誤りがあるという。

これに対し、バスカーの考える科学の対象とは、「科学が探求すべき対象は、経験的に与えられたものでも、現実の領域に明確な姿をもってあらわれたこの世界の一部でもなく、実在の領域に潜む構造である。そして、この実在的構造を現実の領域に顕現させるためにこそ実験が必要なのであり、この構造を的確に把握する概念を得るためにこそ理論研究が求められる」[Ibid. : 15] という。また、そこで発見される「構造」とは、開放システムである当の世界において、あくまで事物の「傾向」（具有されても発動するとは限らず、また発動しても発現したり認知されるかはわからない性質）として把握されなければならないとしている [Ibid. : 11]。

このような理解は、「批判的実在論」が有する存在論の多元的な把握に基づいている。佐藤春吉の紹介によれば、この学派は、「世界は開放システムであり、階層化され、構造化されている…。…バスカーによれば、世界は経験的次元 (empirical domain) と出来事 (event) で成り立つ actual な領域次元 (actual domain) と生成メカニズムや法則などの実在次元 (real domain) という三層で成り立つ。…三層とも実在的なものではあるが、表面から順に存在論的に深いレベルが隠れている…。開放システムでは、因果法則は傾向として働いていても他の干渉をうけて出来事を生起させないこともあるし、出来事が生起していても人間に観察され経験されないこともある」[佐藤 2008 : 52] という多元的な存在論を展開している。このような「批判的実在論」は、既述の実証主義が抱える問題に制約されない形の新たな科学の方法を提示している。このことは、現代社会学で膨大な数を有する実証主義的な研究とは異なった、新たな研究アプローチを生み出す可能性を持っていると言えるだろう。

以上、バスカーの「批判的実在論」の現代社会学における応用可能性について見てきたが、最後に彼が考える社会科学の役割とイデオロギー批判について言及してこの稿を終えたい。バスカーによれば、社会科学の役割は、さまざまな形態をとる人間の意識的活動に対して、それを規定している構造的条件を明らかにすることであり、その力量次第で「人々の解放すなわち制約突破に役立つ」学問たりうるかどうかが決まるという [Ibid. : 30,41]。また、トータルな把握に基づいた真のイデオロギー批判について、「P という観念集合にイデオロギーという呼称を与えてよいのは、その必然性が明示される場合のみである。言い

換えると、それらを批判するとともに説明することができる場合のみである、…その点に加え、なぜそうした誤った信念や皮相な観念が抱かれるのかについてもきちんと根拠を示さなくてはならないのである。…／…イデオロギー概念が徹底的に究明されれば、事実とは何かは解明され、それを媒介にして価値の事実評価は事実の価値評価へと転化する」[Ibid.: 59-60] と指摘する。これらのことは、社会科学にたずさわるものとして肝に銘じておかなければならない姿勢である。「批判的实在論」の検討を通じて、その現代社会学への応用可能性も然ることながら、社会科学の役割とは何か、真の批判とは何かという問題をあらためて深く考える機会を得たことは個人としては何よりの収穫であったと思う。

【参考・引用文献一覧】

Bhaskar, R. [1979], *The Possibility of Naturalism: A Philosophical Critique of the Contemporary Human Sciences*, Brighton. (=式部信訳『自然主義の可能性——現代社会科学批判』晃洋書房、2006年)

佐藤春吉 [2008] 「存在論からの社会科学の刷新——批判的实在論を参照点にして」、関西唯物論研究会編『唯物論と現代』第40号（文理閣）

以上

.....

⑦赤松千代（受講生、博士前期課程1回生）

※以下、赤松千代さんの研究報告をそのまま転載する。

.....

2013年度 先進プロジェクト研究、研究報告 赤松千代

前回のレポートでは、Roy Bhaskarの著書「THE POSSIBILITY OF NATURALISM」（邦訳：「自然主義の可能性」）や批判实在論研究者による「Explaining Society」の内容に沿って、自分なりに整理、理解したことを述べた。今回は、前回の整理を冒頭に述べ、それらの整理を踏まえて、私の研究対象である「社会運動」とBhaskarの議論がどう結びつくのかを考察してみたい。

Bhaskarは社会科学と自然科学の方法についての科学哲学者の議論を批判している。その批判すべき点として「それらの論者がほぼ例外なく、自然科学に関しては基本的に実証主義の見方が成り立つ、とする根本的に誤った考えを受け入れている点」であり「あるいは（より一般的に）、経験論的存在論が成り立つ、とする考えを受け入れている点である。」と述べている。そして、このような見方のために、自然科学と社会科学を正しく位置づけることができない、という主張を述べた。そのような議論の中でBhaskarによって「基本

的に実在論に基づく、実証主義的ではない限定された自然主義の見方」¹⁾が提案される。その見方においては、自然科学と社会科学には共通の方法がある一方、それぞれ主題や題材との関係の取り方が異なるためにその方法には重大な違いもある、としており、Bhaskarは、「存在論的・認識論的・関係論的考察を通じて、自然主義が成り立つためにはその見方にある一定の制限が加えられねばならない」という議論を「自然主義の可能性」で展開している。

上記のような科学哲学者の論争における「存在論的・認識論的・関係論的考察を通じて、自然主義が成り立つためにはその見方にある一定の制限が加えられねばならない」というBhaskarの提案は、「Explaining Society」の「structural analysis」という節の一段落目に、方法論は研究対象の性質や研究の目的へ関連していなければならないという決まりをどのように満たすべきかという命題に言及する文脈において展開されている。それは、「問題に対しての目的や手掛かりは際限なく変化するので、我々は研究に基づく対象の性質を観察することによって方法論の原則を制限する。—それは我々が獲得する知識のためにもっている可能性を決定する対象の性質である」というものである。この節では社会科学における「構造分析」(structural analysis)を中心になされているが、「研究に基づく対象を観察する」という制限を設けることで、関係論における科学の方法を説明している部分であるように思う。

この「構造分析」においては、社会科学や社会心理学と対象、などといった「関係」についての考察がなされている。「社会科学と社会心理学の方法論的区別を行うことによって、もし前者の対象が社会構造であるなら、後者は社会の相互作用である。それらは、次のような社会の研究によって結合するかもしれない。それは、エージェントが再生産もしくは変形する地位や実践の間の関係のシステムを証明するような研究である」(Bhaskar 1989b:93)とBhaskarは言う。彼の議論の本質は、「Explaining Society」の「structural analysis」第4段落目にあるように「社会科学の対象は他の対象と関係があるという決定的な理解に直面する。しかしながら、具体的な研究計画においてこのことは我々が研究の対象とするためのいくつかの異なる型を取り扱うということの意味する」という点に現れている。

以上が前回で整理したことである。今回はこの「関係」についての考察を、自身の研究対象である「3.11以降の反原発運動」にひきつけて行いたい。

ある対象を捉えたい時に、その対象が他の対象からどのような影響を受けているのか、あるいは、他の対象にどのような影響を及ぼすのかを考えることは、その対象の性質や特徴を浮き彫りにする際に重要なことである。そういった意味である対象と他の対象の「関係」に着目し分析することには大きな意味がある。では、「3.11以降の社会運動」に関係する現象や対象には一体どんなものがあるのか。その特徴としてどんなものが挙げられるようになるのか。

3.11 以降、原発事故や震災への政府や東京電力の対応に怒りと不安を覚えた人が社会運動に参加するようになる。「3.11 以降の社会運動」は「原発事故」や「政府・東電の対応」によって引き起こされる。しかし、これだけでは、その起因の一端を単純に述べただけになり、「3.11 以降の社会運動」の性質や特徴を明らかにすることはできない。そのさらに背景にある、「経済の低迷」を見ることによって、「3.11 以降の社会運動の参加者」の特徴をみることができるようになる。

現在の日本社会は、製造業中心の工業化社会からポスト工業化社会へ移行した社会であり、グローバル化の進んだ社会である。このような社会の中では、賃金の安い国外工場へメールでの精密な図面やり取り、本部からの情報で店頭在庫や個別配送を管理することができるようになり、熟練や長期雇用の意味はなくなる。同時に、企画をたてるなどの知的付加価値を高める中核労働者の他は、随時契約の専門技術者、短期非正規雇用の単純労働者に分化が進み、その結果、格差は大きくなり雇用の不安定化するようになる。雇用の流動化と不安定化によって政治も流動化するようになり無党派層は増加する。人々の雇用形態や勤務形態は「自由」で「多様」になり、労組などの組織率は低下、家族や地域社会といった共同体は崩壊する。動員力を持てなくなった組織に代わって、運動への呼びかけで集まるようになるのは、組織労働者や学生といった特定の集団ではなく、老若男女のあらゆる無党派層になる。

「経済の低迷」によって雇用が不安定化した人々が多くなっていく中で、現在の社会運動は発生した。その運動に参加している人々は、音楽や芸術など企業に属さず独立している人々や自営業を営んでいる人々が多い。このように、「3.11 以降の社会運動」と「経済の低迷」の関係をみることによって、社会運動に参加する人々の特徴を、捉えることができる。

「関係」を捉え、その対象の性質を明らかにしていくことは、科学において当然のことである。しかし、Bhaskar は研究者にとって自明であるその原則を、言葉にし、考察しなおした。そのことによって、「関係」とはなにか、どんなものが「関係」なのかなど、改めて個人が考えなおすことができる点に、自身の科学性を問い直すきっかけを与えてくれるように思われるのである。

以上

.....